

独り言から始まる連鎖組織の類型化

— 会話教育の指導項目を考える —

呉 秦 芳

1. はじめに

私たちは、「順番」を取ることによって会話に参加し、「順番」を交替することによって、ひと連りの、何らかのまとまりのある「会話」を生み出している。この順番の連なり方は、直前の順番で言われたことを踏まえて次の順番が産出されているはずである。そうでなければ、その会話は成立しないであろう。相互行為が順番に交代していくという連鎖的な組織構造を見つけたことは、会話分析の発展の中で最初の重要な発見の一つであり、注意の焦点でもある。会話教育においては、感謝、謝罪、依頼、勧誘、許可等の会話については指導項目として定着しているが、タスクを達成するための「課題指向対話」は、少なくとも教材を見る限り、体系的に扱われているとは言えないというのが現状である。このような問題意識から、本研究では、会話教育においてタスクを達成するための対話を体系的に扱うために、連鎖組織を単位として指導することの有効性を探求する。そこで本研究では、『日本語話し言葉コーパス (CSJ と略す)』¹⁾の「課題指向対話」における日本語母語話者間の独り言から始まる連鎖組織をデータとして分析し、その隣接ペアにおける日本語母語話者間、独り言から始まる連鎖組織の形式と機能に着目し、性別に表れるコミュニケーションにおける配慮表現としてのポライトネス・ストラテジーとの関係にも言及しながら、「課題指向対話」がどのような連鎖組織及びその組み合わせから成るのかを明らかにしたい。その使用実態などの様相から、コミュニケーションにおける配慮表現としてのポライトネス・ストラテジーにも焦点を当て、会話教育へ応用する可能性を探る試みである。

2. 先行研究

日本語の会話における独り言に関する研究は、管見では少ないが、平本 (2011) が挙げられる。平本 (2011) では、会話中で「直前の話題の内容を名詞 (句) の形で表すアイテムが含まれ、かつそれ自体ではその話題について展開を行う命題内容をもたない発話」(平本 2011:102) を、「話題アイテムの掘み出し」と呼び、そのような発話が話題の展開においてどのような働きをするのかについて考察を行っている。本研究で見る独り言は、「掘み出し」と異なり、命題内容を持つ発話であるが、発話の形式上、次のターンを取得する者は制約されておらず、また次のターンで特定のタイプの発話が要求されているわけでもない。したがって、独り言は、他の会話参加者によって反応が示されなくてもか

まわらないという形をとり、会話を終わらせないための一つの話題の可能性を提供する発話であると言える。独り言を次の話題へのきっかけとして扱うかどうかは、他の会話参加者に委ねられている。また、本研究において、平本の「掘み出し」を独り言の中に入れていないのは、本研究での話題の区分方法では、「掘み出し」は直前の話題と連続したものとして捉えられ、「掘み出し」から新しい話題が開始されたとは判断されないからである。

3. 調査概要

3.1 独り言とは

独り言は、会話の中の様々な位置で発せられる可能性があるが、本研究で扱うのは、一つの話題が終わったと会話参加者がみなし、次の話題を開始することが可能な位置において発せられる独り言形式の発話である。本研究では独り言によって話題が開始される際の連鎖組織を取り上げる。また、扱う独り言とは、「おなかペコペコ」といった話者自身の状態についての現象描写や、「疑問詞+V-よう」、「疑問詞+～んだろう」、或いは助詞「な」「かな」を含むものの、聞き手に応答を求める形式を取っていない発話で、話者の抱えている問題や意志、感情、感覚、評価など、話者の思考・感覚を表す発話を指す。

3.2 調査方法

本調査は CSJ における「課題指向対話」(接触場面 10 会話)を録音し、文字化したものを調査対象とした。この文字化した資料の中から、日本語母語話者の独り言から始まる連鎖組織をピックアップして、分析、考察を行った。文字化の際には、「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese :BTSJ)」(宇佐美 2011)に従って文字化した。また、雑談資料ではなく、タスクを与えての会話資料を扱った。雑談では、相手に割り込むまで会話を進行させるために積極的に働きかけたり、自分の意見を言ったりすることは少ないと考えたからである。本研究で扱う CSJ の課題指向対話の具体的な内容は、実在の芸能人に講演を依頼した場合の謝礼 (ギャラ) の額を想像し、その多寡の順に、芸能人 9 ないし 10 名をソートするタスク (ギャラ・タスク) が考案されたものである。対話開始時点で各話者に手渡されている人名リストは、わざと一致しないように作成してあるので、謝礼額の推定に先立って (あるいは同時に)、推定対象となる芸能人の完全なリストを作成するための対話も必要とされる。インタビューは 20 代と 30 代の女性各 1 名である。ここでは、発話の「機能や効果」を談話レベルで分析していく。「CSJ」のインタビュー (以下「L」) と応答者 (以下「R」) のデータは次の (表 1) である。

(表1) インフォーマントの構成²⁾

| ファイル | | インタビュアー(L) (出身地・年齢) | 応答者(R) (出身地・年齢) |
|------------|----------|------------------------|--------------------|
| 女-男 L-R | D02M0014 | 神奈川・30代 | 神奈川・30代 |
| | D02M0028 | 埼玉・20代 | 埼玉・20代 |
| | D02M0035 | 神奈川・30代 | 北海道・20代 |
| | D02M0039 | 神奈川・30代 | 東京・30代 |
| | D02M0051 | 神奈川・30代 | 神奈川・20代 |
| 女-女 L-R | D02F0015 | 埼玉・20代 | 東京・30代 |
| | D02F0018 | 神奈川・30代 | 東京・30代 |
| | D02F0025 | 神奈川・30代 | 神奈川・20代 |
| | D02F0031 | 神奈川・20代 | 神奈川・30代 |
| | D02F0032 | 神奈川・30代 | 宮崎・20代 |

4. 理論の枠組み

4.1 連鎖組織

「連鎖組織」という概念は、会話を相互行為として分析する会話分析の主要な概念として知られている。会話分析では、会話は、参加者がターンを交代しながら発話をやりとりすることによって行われる活動であり、どのようなタイプの発話の後にどのようなタイプの発話がなされるかについての規範的な期待が存在すると考えて、発話と発話の連なり方に注目する。タイプAの発話の後にタイプBの発話がなされることが期待される時、その二つの発話の関係は連鎖(sequence)と呼ばれる関係と見なすことができ、その二つの発話によるセットは連鎖組織(sequence organization)と認められる。Schegloff&Sacks(1973)では、そのような連鎖組織の最も基本的なものとして、隣接ペアを挙げている。

隣接ペアの代表的なものとしては、「〈質問をする〉〈答える〉」「〈挨拶をする〉〈挨拶を返す〉」のように「一方が開始しもう一方がそれに応じる initiate and respond」などがあげられる。「〈質問をする〉」や「〈挨拶をする〉」のように話し手が発話によってなそうとすること、そのものに当たる機能(主要機能)もあれば、〈(質問をする前に) 解釈する〉あるいは〈(挨拶をする前に) 相手の名前を呼ぶ〉などのように発話目的が円滑に遂行されるように補助する機能(二次的機能)もある。話し手は、自らのターンの中でこのような何らかの機能を持った発話を一つあるいはいくつを組み合わせて「やり取り」を進める。本研究ではこのような枠組みを「独り言から始まる連鎖組織のストラテジー」とし、談話機能の分類に適用することとする。

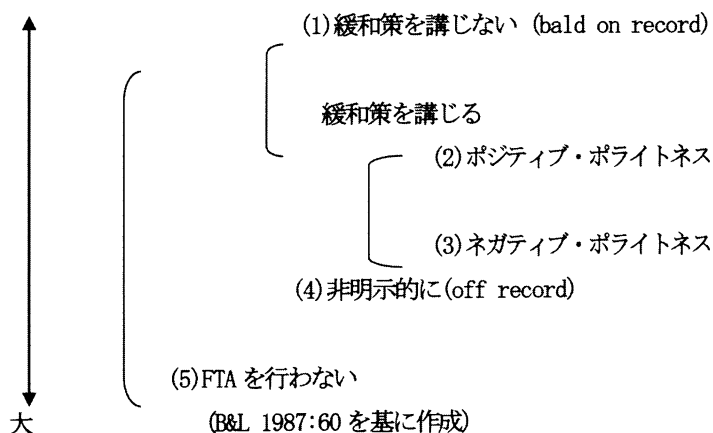
4.2 Brown&Levinson のポライトネス

ポライトネスに関して、最も影響力のある Brown& Levinson (以下、B&L) (1987(1978)) のポライトネス理論の根幹は、コミュニケーション参加者双方が、フェイス(face)保持を基本的欲求として重視し、フェイスを侵害する恐れがある言語行動(FTA: face threatening acts(面子威嚇行動、以下、FTAと省略))を取るにあたっては、あらかじめ見積もった侵害の程度に応じてフェイス侵害を補償

するための戦略（FTA 補償戦略）を使用するというものである。B&L (1987(1978)) はFTAの度合いに応じて、(図1)のように戦略が選ばれているとしている。円満な人間関係を保持し、円滑なコミュニケーションを図るためにはFTAによる面子の威嚇度を最小に抑えるような戦略をとらなければならない。

FTAを行う

小 明示的に (on record)



(図1) FTAの度合い (フェイスを失う/失わせる危険度の評価)

(図1) からわかるように、FTAを行うためには五つの戦略がある。(1)は直接的な言語行動を取り、すなわち、思ったことをありのままに言い、FTAを直接行うことである。(2)は他人に正しく認められたい、正しく評価されたいという欲求であり (ポジティブ・ポライトネス)、(3)は自分の領域や行動を侵害されたくないという欲求である (ネガティブ・ポライトネス)。(4)は皮肉や比喻を使って間接的に表現すること、(5)はFTAを全く行わないものである。

(図1) の小と大はFTAの度合いを指し、つまり、下のものほどリスクが大きい時に使われる戦略で、上のものほど、相手のフェイスを傷つけるリスクが小さい時に使われるものである。

5. 分析と考察

5.1 独り言から始まる連鎖組織の形式の分類

筒井 (2012) を参考にし、独り言から始まる連鎖組織の形式、つまり、その意味論的機能を、話者の感情・感覚などを表出する連鎖組織と、話者が抱いている問題について思案する連鎖組織の通りに分類した。前者では「感覚」、「感情」、後者では「思案」の話題が見られた。話者の感情・感覚などを表出する連鎖組織は、「V-たい/V-ないといけない」の願望の表現や感情形容詞などが典型的である。一方、問題を思案する連鎖組織は、自分が抱いている問題を問題提示の発話で提示することによって話題を開始する。「疑問詞+～んだろう」や、「疑問詞+V-よう」、終助詞「かな」など、疑念を表明する形式によって、独り言の形式で発話される。これらの発話は、単に事実を述べているのではなく、何らか

の気分や感慨などを表していると考えられるためである。具体的にどのような「連鎖組織」の機能が多用されていたかをみると、(表3)のように、男性(59.8%)、女性(61.9%)を問わず、「感覚」や「感情」などの表出に関する「感覚系」の使用頻度が「思案」の表出に関する「思考系」より多く現れることがわかった。以下タイプ1(思考系の連鎖組織)とタイプ2(感情系の連鎖組織)に分けて、例文を見ながら、検討していく。

5.2 思案系に関する連鎖組織

5.2.1 男性の「思考系」の例

(例1) (D02M0035のデータより) (L:女性; R:男性)

| ライン番号 | 発話文番号 | 発話終了 | 話者 | 発話内容 | 機能 |
|-------|-------|------|----|--|------|
| 19 | 18 | * | L | ちょっと(Dし)このコピーがあんまり良くない。 | 情報提供 |
| 20 | 19 | * | R | <笑>。 | |
| 21 | 20 | * | L | そして? | |
| 22 | 21 | * | R | (F えー)二段目の左側小林亜星。 | |
| 23 | 22 | * | L | (F はい)。 | |
| 24 | 23 | * | R | 真ん中は、どっかで見たことあんですけどね、 <u>誰でしょうね?。[↑]</u> | 思案 |
| 25 | 24 | * | L | 清水じゃなくて、何だっけ?。[↑] | |
| 26 | 25 | * | R | (F あー)名前思い出せない(F んーとねー)(F えーとね)(D に)もうちょっと待ってください思い出します。 | |
| 27 | 26 | * | L | (F はい)。 | |
| 28 | 27 | * | R | <笑>。 | |
| 29 | 28 | * | L | (F えー)右側吉村作治ですね。 | |
| 30 | 29 | * | R | (F はい)。 | |

〈問題思考の連鎖組織〉

01A: 問題提示

02B: 弱い声や小さい声

03A: 解答

(例1)では、24行目の23Rの問題提示の発話が、終助詞「かな」や「～でしょうね」など、疑問を表明する形式によって独り言の形式で発話される。この発話は、相手に明示的に応答を要求しておらず、25行目の24Lでは「清水じゃなくて、何だっけ?。[↑]」は、問題提示を聞いたことを表すと同時に、問題に対して解答を与えない、すなわち問題解決のやりとりには関わらないということの表示

となる。とはいえ、その後に、独り言ではないタイプの連鎖組織に移行し、会話参加者双方が対話する形で、その話題についての会話がしばらくの間続けられていた。

(例1)の言語形式については、問題提示と解答において「かな」という概念を表す終助詞が特徴的であった。問題提示の発話は、全体的に小さい声や弱い声で発話されることが多いことが観察される。このようなパラ言語的な特徴によって、問題提示の発話は、独り言として聞こえるように発話されているのである。

5.3 感情・感覚などの表出に関する連鎖組織

感情・感覚などの表出の連鎖組織とは、意見表出の発話によって、会話参加者の発話時の評価、感情、感覚、欲求、意志などを表出する発話から開始される、以下のような連鎖組織である。

〈感情・感覚などの表出に関する連鎖組織〉

| |
|--------------|
| 01A:意見表出 |
| 02B:弱い声や小さい声 |

5.3.1 女性の「感覚系」の例

(例2)での「そうだね、でもこの人何か(Fん)ゲスト出演とか(Dへ)すると(Dう)するっていうのがあんまり感覚が分からない。」という145行目132Rの発話は、平本(2011)の「話題の掴み出し」とよく似た形式である。このような発話の形式は、「掴み出し」とその後の展開を一つのターンで行っていると見るのが可能であるが、その場合、「掴み出し」の、次の発話者と発話のタイプへの制約のなさという特徴が失われることになる。話題を続けていくという雑談の大きな目的に対して、「掴み出し」は話題の継続に対してより積極的に関わろうとする発話であり、平本の言う「掴み出し」のような、いわば無標の話題提供とは異なる、制約の強い発話として働くことになる。これはFTAを緩和する配慮表現として捉えることができる。

(例2) (D02F0025のデータより) (L:女性; R:女性)

| ライン番号 | 発話文番号 | 発話終了 | 話者 | 発話内容 | 機能 |
|-------|-------|------|----|--|------|
| 140 | 128 | * | L | <筑紫(D(?ん))>{>} (Fうーん)(Fうん)(Fうん)(Fうん)(Fうん)(Fうん)(Fうん)利かしてそう。 | 情報提供 |
| 141 | 129 | * | R | 何かこう(Dう)芸能界で幅利かせてそうだから<笑>。 | |
| 142 | 130-1 | / | L | うつみ、うつみ筑紫さんも結構、 | |
| 143 | 131 | * | R | (Fあー)高いのかな?。[↑] | |
| 144 | 130-2 | * | L | 高いかな(Dい)今(Dい)現役でやってるし。 | |
| 145 | 132 | * | R | そうだね、 <u>でもこの人何か(Fん)ゲスト出演とか(D</u> | 意見表示 |

| | | | | | |
|-----|-----|---|---|-------------------------------------|------|
| | | | | へ)すると(D う)するっていうのがあんまり感覚が分 からない。 | (評価) |
| 146 | 133 | * | L | 確かに<笑>。 | |
| 147 | 134 | * | R | ね??[↑] | |
| 148 | 135 | * | L | 確かに、確かに。 | |
| 149 | 136 | * | R | (F うーん)。 | |

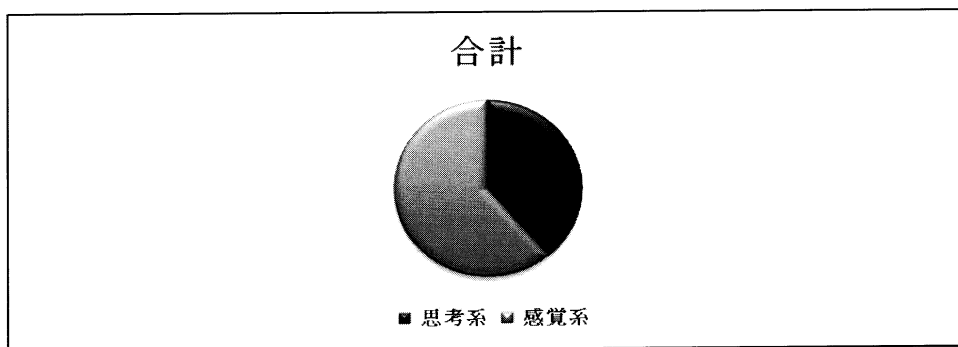
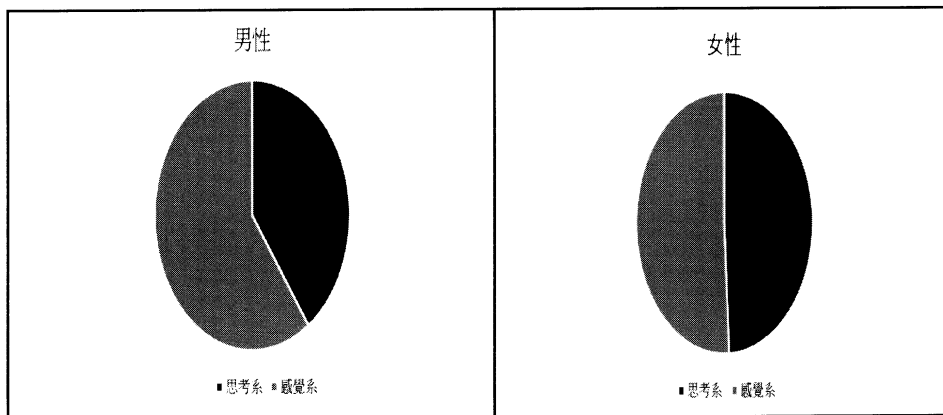
6. 調査結果

結果を見ると、独り言から始まる連鎖組織として、話者の感情・感覚などを表出する連鎖組織と、話者が抱えている問題について思案する連鎖組織とに分けられ、前者では「感覚」、「感情」、後者では「思案」の話題が見られた。話者の感覚・感情などを表出する連鎖組織は、「V-たい/V-ないといけない」の願望の表現や感情形容詞などが典型的である。一方、問題を思案する連鎖組織は、自分が抱えている問題を問題提示の発話で提示することによって話題を開始する。「疑問詞+～んだろう」や、「疑問詞+V-よう」、終助詞「かな」など、疑念を表明する形式によって、独り言の形式で発話される。これらの発話は、単に事実を述べているのではなく、何らかの気分や感慨などを表していると考えられるためである。

具体的にどのような「連鎖組織」の機能が多用されていたかをみると、(表2)に示すように、男性(59.8%)、女性(61.9%)を問わず、「感覚」や「感情」などの表出に関する「感覚系」の使用頻度が「思案」の表出に関する「思考系」より多く現れることがわかった。また、(表3)からわかるように、女性のインタビューに対して、女性は「意志」、「評価」というストラテジーを多く使用することが分かった。これらの発話は自己開示的な性格を持っており、参加者間で思考や感覚を共有したり理解したりすることを強制することなく、話題提示を受け取り、話題を展開させる行為により、発話者の態度や考え方などを受け入れてほしいという意図を知らせるポジティブ・ボライトネスに関連する機能の存在を示している。それに対して、男性の会話では「思案」や「感覚」を女性より多く使用する傾向が窺えた。これはFTAを緩和する配慮表現として捉えることができる。言い換えれば、相手の顔を立て、立場を顧慮するという配慮が働いており、この部分はネガティブ・フェイスを重視していると考えられる。

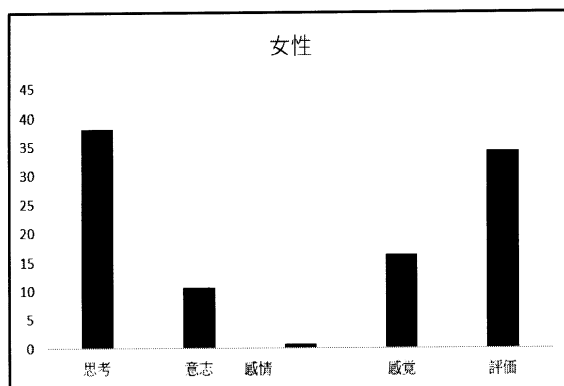
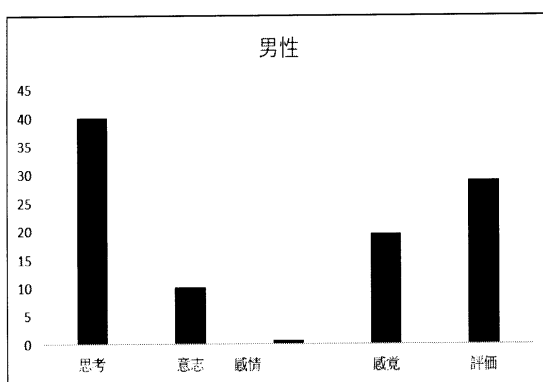
(表2) 独り言から始まる連鎖組織の形式の出現頻度(延べ語数)

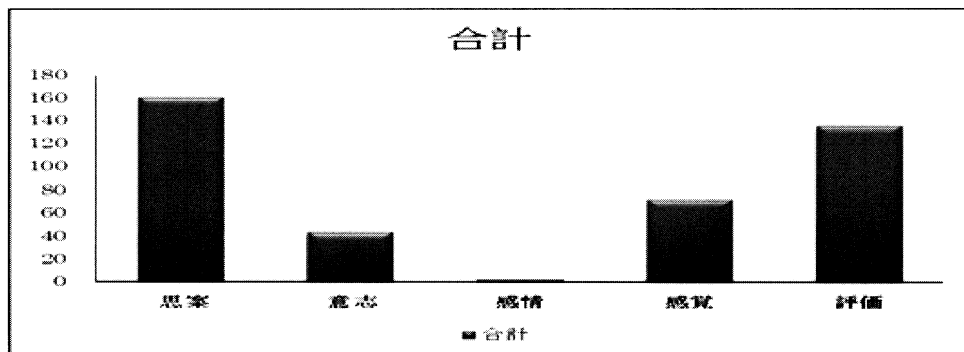
| | 思考系 | 感覚系 | 合計 |
|----|-------------|-------------|------------|
| 男性 | 51 (40.2%) | 76 (59.8%) | 127 (100%) |
| 女性 | 110 (38.1%) | 179 (61.9%) | 289 (100%) |
| 合計 | 161 (38.7%) | 255 (61.3%) | 416 (100%) |



(表3) 独り言から始まる連鎖組織の内容の出現頻度 (延べ語数)

| | 思案 | 意志 | 感情 | 感覚 | 評価 | 合計 |
|----|-------------|------------|----------|------------|-------------|------------|
| 男性 | 51 (40.2%) | 13 (10.2%) | 1 (0.8%) | 25 (19.7%) | 37 (29.1%) | 127 (100%) |
| 女性 | 110 (38.1%) | 31 (10.7%) | 2 (0.7%) | 47 (16.3%) | 99 (34.3%) | 289 (100%) |
| 合計 | 161 (38.7%) | 44 (10.6%) | 3 (0.7%) | 72 (17.3%) | 136 (32.7%) | 416 (100%) |





7. 談話技能の指導項目の取り上げ方と教室活動

談話レベルでの会話教育のための談話技能の指導項目について、その取り上げ方に対する実際の教室活動の行い方、教師の姿勢、その具体例について述べる。

まず、実際の教室活動の行い方としては、取り上げる談話技能項目を、単に雛形的なものとして丸暗記させるのではなく、一つ一つの会話の中で生じ、相互行為によって変わる動的なものとして捉え、その相互行為の中で意識させ、練習させ、フィードバックを与えていくべきものであると考える。つまり、Kramsch(1986)が主張するような異文化間コミュニケーションにおける「相互行為能力(interactional competence)」の育成を目指すべきであると言える。例えば、日本でモノリンガルな日本語母語話者と話すのか、非母語話者同士で日本語で話すのかといった、会話相手の背景、会話相手との相互行為で、談話技能の用い方が動的に変わることが認識させることが重要であろう。教師の姿勢としては、独り言から始まる連鎖組織の形式をただ提示するのではなく、学習者の個性や母語の影響、談話能力のレベル、コースの形態や目標等に応じて、ほかの指導項目との関連性を意識しながら、総合的に指導していくことが重要であろう。また、実際の運用に関しては、学習者の視点が大切にされるべきものであり、教師の役割は、学習者が使える技能の選択を増やし、談話技能を知識化し、学習者が自ら持つ技能と照らし合わせ、必要に応じて自分の意志で選択し、その選び取った技能が使えるようになるという一連のプロセスの形成を支援していくものであると考える。つまり、学習者自身で母語と日本語の相違点について考えさせ、身につけたいものをより自由に選ばせるような環境作りが必要であろう。

以上のような類型化は、CSJの「課題指向対話」における話題内容とその開始の仕方、及びその後の展開を、言語形式を伴う型として学習者に提示するための枠組みとなる。本稿は日本語母語話者の独り言から始まる連鎖組織を対象に考察を行ったが、今後個人差にも注目しながら、「課題指向対話」以外の発話から始まる連鎖も含め、使用可能な状況や型と型の組み合わせ等については、さらなる分析が必要である。日本語母語話者は会話の場面や対話の場面など様々な場面でどのような独り言から始まる連鎖組織を使用しているのかについても明らかにしたいと考えている。

参考文献

- Brown, Penelope and Levinson, Stephen. (1987) Politeness: Some Universals in Language Usage (reissued) Cambridge University Press
- Kramsch, Claire. 1986. From language proficiency to interactional competence. *Modern Language Journal*. 40, 4: 366-372
- Neustupny, J. V. 1992. The use of teaching assistants in Japanese language teaching. 『世界の日本語教育』 2: 199-213
- Schegloff Emanuel A. (2007) Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis. Vol. 1. Cambridge: Cambridge University Press.
- 宇佐美まゆみ (2011) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2011年版」 <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj2011.pdf>
- 岡崎志津子 (1989) 「日本語教育におけるストラテジー指導」『東京国際大学論商学部編』 40 p. 87- p. 101
- 下瀬川慧子 (1999) 「日本語話し方技能チェックリスト」 試案 東海大学紀要留学生センター19 p. 1- p. 15
- 平本毅 (2011) 「話題アイテムの掘み出し」『現代社会学理論』 5: 101-119
- 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ』 くろしお出版
- 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』 くろしお出版
- 西郷英樹 清水崇文 (2004) 『日常会話力がグーンとアップする雑談指導のススメ』 凡人社

付記

本稿は『『2018年 One Asia 亞洲共同體論壇—台灣與亞洲之多元化與永續發展—』 p. 41~p. 47 (真理大學會場) (2018年12月) の内容に加筆し、修正を加えたものである。本研究は、106年度行政院国家科学委員会研究費による新進人員專題研究「日語談話中由個人發話開始的連鎖組織之考察」(計画番号 MOST106-2410-H-156-007 研究代表者: 吳秦芳) の研究成果の一部である。

注

- 1) 「CSJ」とは、日本語の自発音声を大量に集めて多くの研究用情報を付加した話し言葉研究用のデータベースであり、国立国語研究所・情報通信研究機構(旧通信総合研究所)・東京工業大学が共同開発した、質・量ともに世界最高水準の話し言葉データベースである。本コーパスは、音声言語情報処理、自然言語処理、日本語学、言語学、音声学、心理学、社会学、日本語教育、辞書編纂など幅広い領域で利用されている。(http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cs_j/ p. 6~p. 7 を参照)
- 2) インタビュアー(L)と応答者(R)のペアについて、ファイル名のFは女性と女性を指すが、ファイル名のMは女性と男性を表す。年齢、性別の変数を配慮しているため、CSJに含まれる対話データから D02F0015、D02F0018、D02F0025、D02F0031、D02F0032、D02M0014、D02M0028、D02M0035、D02M0039、D02M0051 の10対話を標本として選び、作成した。従って、これは、無作為抽出ではない。